

子どものQOLにおける 親子の認識の差に関する考察

海野 遥香¹・橋本 成仁²

¹学生会員 岡山大学大学院 環境生命科学研究科 (〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中3丁目1-1)

E-mail:unoharuka@s.okayama-u.ac.jp

²正会員 岡山大学大学院准教授 環境生命科学研究科 (〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中3丁目1-1)

E-mail:seiji@okayama-u.ac.jp

近年、一人ひとりの人生の内容の質や社会的に見た生活の質を指すQOLが重要視されており、子どものQOLに関する研究も進んでいる。より子どものQOL向上を目指すためには親子での子どものQOL認識が一致していることが望ましいと考え、本研究では、対象となる小学校高学年の子ども自身が評価する子どものQOLと、親が認識する子どものQOLの差の有無を明らかにする。また、認識の差を生む項目と子どもの生活環境や学外での行動との関連分析も行う。結果として、QOL尺度24項目中18項目で親子の得点の平均値の差が見られ、親子ペアで詳細に見ると、友達関係、身体の不調に関して特に親子でQOLの認識に差が生まれていることが示された。またそれらの項目と子どもの周辺環境との関連性がみられる遊び・学外活動の特徴も把握した。

Key Words : children'QOL, parent-child perception, fun-activities, out of school activities

1. はじめに

近年、我が国では、一人ひとりの人生の内容の質や社会的に見た生活の質を指すQOL (Quality Of Life) が重要視されている。その中で、子どものQOLも小児保健の分野で研究が進んでおり、子ども独自のQOL指標の開発・研究も進んでいる¹⁾。

子どものQOLに関する既存研究として、柴田ら²⁾は、ドイツで開発され英語版に翻訳された子どものQOL尺度の精度と日本での適用可能性について検証を行った。子どものQOLの高低と男女差、子どものQOLに関する親子の認識の差、子どもの人間関係について検討し、子どものQOL向上のためには親との認識の差、ソーシャル・ネットワークを考慮する必要があることを明らかにした。松田ら³⁾は小児保健での様々な子どもを対象にしたQOL尺度を比較し、QOLの最大の特徴は当事者が自分自身の置かれた状況を主観的に評価できる点だと述べている。高橋⁴⁾は、日本の子どものQOLについてWHOのQOL尺度に基づき調査を行い、総得点は学年が上がるにつれて低下する傾向にあることを示している。岩坂ら⁵⁾は、子どものQOLと行動特性との関連を分析し、子どもの行動・情緒と強い関連性があることを示した。

また、QOL指標を用いた研究として、長尾ら⁶⁾は都市

のコンパクト化を進める上でQOL指標及び市街地維持費を評価値とし最適化を行い、結果として、好ましい住民の移転地区を明らかにした。また、加知ら⁷⁾は、QOL尺度を用いて都市内各地区の「余命」を尺度として定義し、提案する手法を実際の地方部に適用した結果、分散集中型への誘導が望ましいことが示された。欧州では地域の評価指標としてQOLを設定している国も見受けられ⁸⁾、研究のみならず実践の部分でもQOLが様々な事象の評価指標となっていることが分かっている。

これらの既存研究より、子どものQOLに関して、小児保健分野で研究や指標の開発が進み、子どもの行動との関連を示したものも見受けられた。また子どものQOLにおける親子の認識の差に着目した研究も見受けられた。QOL指標を用いた研究では、都市の評価軸として居住者のQOLを用いたものが多く見受けられた。

QOLに関して、またQOLを用いた都市の評価についてそれぞれの研究分野で見識を深めているが、子どものQOLにおける親子の認識の差と子どもの地域での生活の様子との関連性等を分析した研究は見受けられない。

筆者は先行研究にて子どもが自分自身で評価したQOL得点と子どもの遊びや生活習慣との関連性を示した。子どものQOLのみに着目すると、QOL得点が高い方が生活の質が高いことを示しているため、QOL得点が高い子ど

も、低い子どもの学校外の自由な時間の過ごし方の特徴をクラスター分析を用いて明らかにした。しかし、更なる子どもの生活の質QOL向上を目指すために、親が認識する子どものQOLと子どものQOLの両者を比較し分析する必要があると考えた。子どものQOLにおける親子の認識の差がない場合、親子のコミュニケーションがとられていることが予想される。しかし、親が認識しているQOL得点が子ども自身が評価する子どものQOL得点より高い場合、子どもの不具合が把握できていない危険性があり、逆に子ども自身が評価する子どものQOL得点が高いにもかかわらず、親が認識する子どものQOL得点が高い場合、過度な心配や教育につながる危険性も考えらる。そのため、本研究では親子でのQOLの認識の差はない方が望ましいと仮説を立て、親子での子どものQOLの認識の差の有無を明らかにし、どの項目で差が生まれているか、また、認識の差がある場合、その親子ペアにはどのような特徴があるのかを把握する必要があると考えた。これらの知見は、子どもが心身ともに健康に生活できる環境づくりの基礎資料になることが期待できる。

そこで本研究では、子どものQOLにおける親子の認識の差に着目し、どの項目で認識の差が生まれているのか、また、認識の差がある項目と子どもの生活環境や学外での行動（遊びや学外活動等）との関連を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

(1) 調査対象地域について

岡山県赤磐市の「岡山ネオポリス」（以下、ネオポリス）と赤磐市中心部の、特徴の異なる2つの地域を対象にして調査を行った。図-1に示すように、赤磐市は県庁所在地である岡山市の北東に位置しており、ネオポリスは昭和51年に発売された大規模住宅団地である。発売時には民間最大規模の住宅地と言われ、岡山市に隣接するベッドタウンとして今もなお分譲中である。

分譲開始から40年が経ち、高齢化が進んでいるものの、現在でも1万1000人以上（市の約45%）⁹⁾の人々が住んでいる。一方、市中心部の小学校区は面積は大きいものの、人口は9000人程度と少ない。

両地区の具体的な状況として、ネオポリス地区内では出入口には自動車が通れないようボラードなどが設置された歩行者専用道路や、クルドサックが多用されており、計画的なニュータウンとなっている。

一方、赤磐市中心部は農業が盛んで田畑が広がり自然も豊かであるが、幹線道路が縦断し、交通量が多く裏道などの街路は入り組んでいるという特徴を持っている。

今回の対象小学校はネオポリス内の3つの小学校（桜が丘小、山陽東小、山陽北小）と、市中心部の1つの小

学校（山陽小）である。これら4校の位置関係を図-2に示す。山陽小学校区の中のグレー部分は他の小学校区であり、今回は対象学区となっていない。

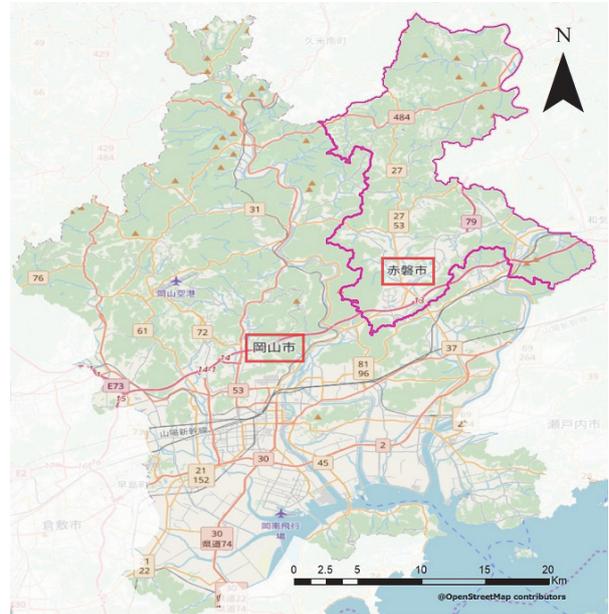


図-1 岡山市と赤磐市の位置関係

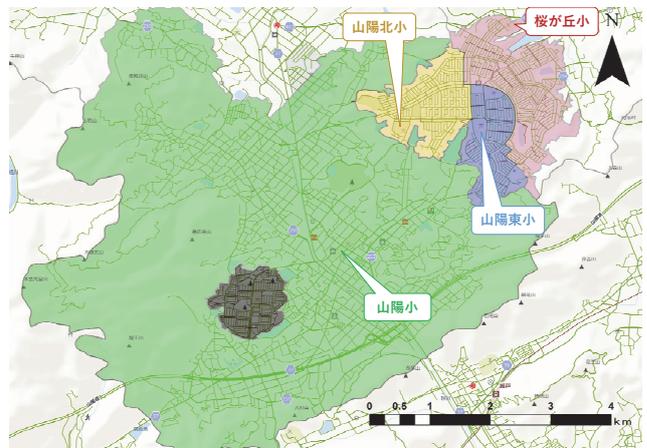


図-2 対象の小学校区

表-1 遊び・学外活動に関するアンケート調査概要

調査名	遊び・学外活動に関するアンケート			
調査方法	アンケート調査（学校配付・学校回収）			
調査対象	小学校5,6年生とその保護者			
調査時期	2018年12月			
調査地域	岡山県赤磐市			
対象学校	山陽小学校	桜が丘小学校	山陽東小学校	山陽北小学校
配付部数（子ども）	125部	105部	149部	187部
	566部			
回収部数（子ども）	122部	86部	47部	183部
	438部			
回収率（子ども）	97.6%	81.9%	32.2%	97.8%
	77.4%			
主な調査項目	<ul style="list-style-type: none"> ・個人属性（性別、学年、住所など） ・1年生のときの遊び・学外活動について ・5,6年生での遊び・学外活動について ・交通安全の意識 ・Kid-KINDLを用いたQOLの測定 			

(2) アンケート調査の概要

次に、アンケート調査の概要を表-1に示す。調査対象は先述の4小学校に通う5,6年生とその保護者とした。質問項目を理解し、地図に書き込むなど地理的感覚を持っていることを考慮し、小学校高学年の児童を対象としている。質問項目は、本研究のカギとなるQOL指標、Kid-KINDL^{1),10)} (1998年, Bullinger), 小学校外での遊びに関する詳細な内容(遊びの内容, 場所, 時間, 一緒に遊ぶ相手や人数, 目的地までの経路等), 習い事等の学外活動の状況, 生活習慣, 個人属性等である。子どもと保護者で同様の項目もあるため, 配布の際には親子間で回答を共有しないよう注意を促した。また, アンケートは各小学校に協力していただき, 各クラスで配付・回収を行い, その期間は約1週間とした。子どもの配付部数は566部, 回収部数は438部, 回収率は77.4%となっている。

子どもの回答者の属性を図-3に示しており, 学校別では山陽北小学校の子どもの回答数が多く, 学年では, 5,6年生の割合は等しく, 男女比も同様の対象サンプルとなっている。

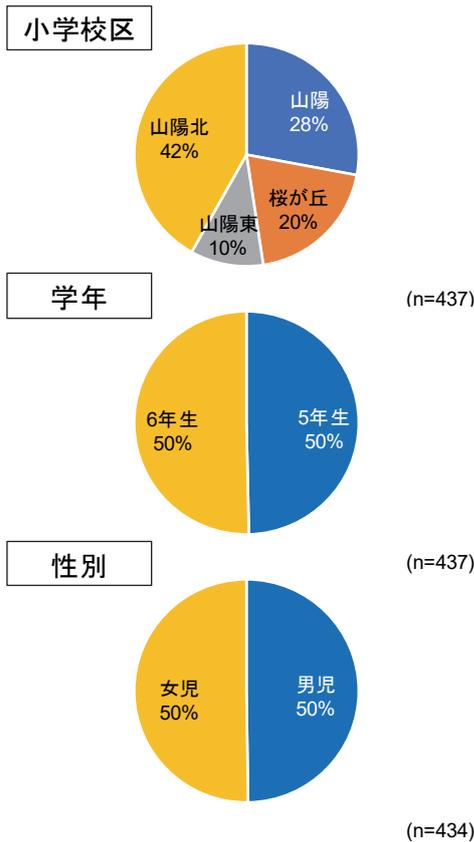


図-3 子どもの回答者属性

(3) QOL尺度について

本研究では, 子どもたちの生活の質を測る指標として, 小中学生版QOL尺度(Kid-KINDL) (以下, QOL)を用いている²⁾。Kid-KINDLは世界で38カ国語に翻訳され

ており, 国内外で心理尺度として有効性・妥当性が認められ, 医学の分野で広く用いられている^{11),12),13)}。

表-2に示している通り身体の状態, 心の状態, 自分自身について, 家族との様子, 友達との様子, 学校生活について, 病気についての7つの質問項目があり, 各項目4~6つの質問, 計30の質問で構成されている。表-2に示した文言は子どもが回答する用の質問項目であり, 保護者に配布した用の質問項目では, 「私の子どもは〜だっ

表-2 QOL尺度質問項目

質問項目 5段階評価 (全然ない:1点~いつも:5点)	
1.身体の状態	私は病気だと思った
	私は頭が痛かった。またはおなかが痛かった。
	私は疲れてぐったりした。
	私は元気いっぱいだった。
2.心の状態	私は楽しかったし、たくさん笑った。
	私はつまらないなあと考えた。
	私は一人ぼっちのような気がした。
	私は何もないのに怖い感じがした。
3.自分自身	私は自分に自信があった。(よくやった)
	私は色々なことができるような気がした。
	私は自分に満足していた。(自分のことが好きだ)
	私はいいことをたくさん思いついた。
4.家族との様子	私は親と仲良くしていた。
	私は家で気持ちよく過ごした。
	私たちは家でけんかをした。
	私は親にやりたいことをさせてもらえなかった。
5.友達との様子	私は友達と一緒に遊んだ。
	他の友達は私のことを好きだった。
	私は私の友達と仲良くしていた。
	私は他の子どもたちに比べて変わっているような気がした。
6.学校での様子	私は学校の勉強は簡単だった。(よくわかった)
	私は学校の授業が楽しかった。
	私はこれからの先のことを心配した。
	私は学校のテストで悪い点数をとらないか心配だった。

※「7.病気に関して」を除く

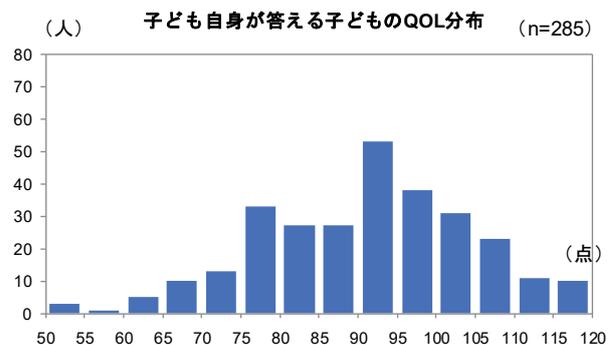
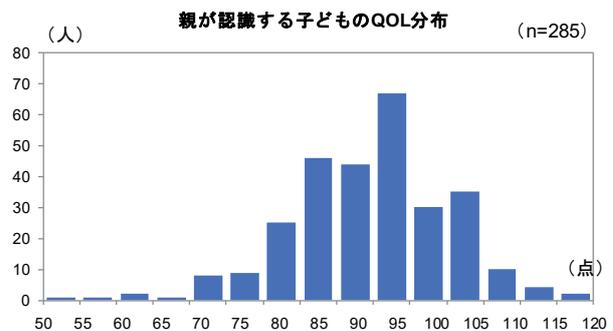


図-4 子どものQOL総得点分布

たようだ」という文言になっている。

質問の形式は各質問を1点～5点（全然ない、ほとんどない、ときどき、たいてい、いつも）までの5件法であり、過去1週間のQOLを評価するものである。

本研究では、病気に関して回答していたサンプルを除外し、24問の合計点(24～120点)を算出してQOLを測定し、高得点であるほど回答者のQOLは高いと判断する。

図-4に本調査の子どものQOLに関して、親が認識する子どものQOL得点分布と子ども自身が答える子どものQOL得点分布を示す。本論文では親子の認識の差を分析対象とするため、親子両者の回答が得られている258サンプルとなっている。

3. 子どものQOLにおける親子の認識の差に関する分析

(1) QOL質問項目の親子間の比較

前章で示した、QOL尺度の各質問項目における親子の認識の差を、母平均の差の検定を用いて分析を行った。

「親と子の認識するQOL得点の母平均は等しい」という帰無仮説を検定し、データの分散が等しいとは言えないためWelchの方法によるt検定を行った。結果を表-3に示す。24の質問項目の内、18項目で $P < 0.05$ を示しており、これらの項目で有意な差がみられた。

詳細にみると、「1. 身体の状態」の「私は頭が痛かった、またはおなかが痛かった。」、「私は疲れてぐっ

たりした。」の2項目において子ども自身が感じるQOL平均点よりも、親が認識するQOL平均点が高いという結果が示された。次に「2. 心の状態」の「私は何もないのに怖い感じがした。」という項目で、親の認識する子どものQOL平均点が1%有意有意水準で高く、「3. 自分自身」では4つすべての項目で親が思う子どものQOL平均点が、子ども自身が感じるQOL平均点よりも高いことが1%有意水準で示された。「4. 家族との様子」の項目でも4つすべての項目で親子の認識に差があることが示されたが、「私は親と仲良くしていた。」、「私は家で気持ちよく過ごした。」、「私は親にやりたいことをさせてもらえなかった。」の3つの項目に関しては子どものQOL平均点が親が認識する子どものQOL平均点よりも高い。「5. 友達との様子」について、「私は友達と一緒に遊んだ。」、「他の友達は私のことを好きだった。」、「私は他の子どもたちに比べて変わっているような気がした。」の3項目においては親が認識する子どものQOL平均点の方が高く、「私は私の友達と仲良くしていた。」の項目のみ、子ども自身が感じるQOL平均点が高い数値を示しており、1%有意水準で差がある。「6. 学校での様子」では2項目で親が認識する子どものQOL平均点が高く、残りの2項目で子ども自身が感じるQOL平均点が高いという結果になった。

(2) QOL総得点に関するモデル

本節では、調査対象の親子間での子どものQOLに関する認識の差が、どの質問項目の影響が大きいのか、数量

表-3 QOL尺度各質問項目における親子の認識の差

質問項目 5段階評価（全然ない：1点～いつも：5点）	平均点		母平均の差の検定結果				
	親	子	統計量:t	自由度	P 値	*: P<0.05 ** : P<0.01	
1.身体の状態	私は病気だと思った	4.635	4.544	1.3479	554.1317	0.1782	
	私は頭が痛かった、またはおなかが痛かった。	4.316	3.975	4.1576	546.6288	P<0.001	**
	私は疲れてぐったりした。	4.165	3.554	6.7021	517.7881	P<0.001	**
2.心の状態	私は元気いっぱいだった。	3.947	3.891	0.6395	534.8066	0.5228	
	私は楽しかったし、たくさん笑った。	4.179	4.084	1.2569	477.5693	0.2094	
	私はつまらないなあと思った。	3.895	3.846	0.6014	512.1354	0.5479	
3.自分自身	私は一人ぼちのような気がした。	4.309	4.351	0.5285	543.9245	0.5974	
	私は何もないのに怖い感じがした。	4.614	4.368	3.2728	490.8174	0.0011	**
	私は自分に自信があった。（よくやった）	3.533	3.014	5.7470	484.1609	P<0.001	**
4.家族との様子	私は色々なことができるような気がした。	3.526	3.025	5.6520	476.3617	P<0.001	**
	私は自分に満足していた。（自分のことが好きだ）	3.625	2.937	7.2332	442.3150	P<0.001	**
	私はいいことをたくさん思いついた。	3.456	3.053	4.4654	492.1260	P<0.001	**
5.友達との様子	私は親と仲良くしていた。	4.168	4.351	2.7251	542.2932	0.0066	**
	私は家で気持ちよく過ごした。	4.161	4.305	2.0090	505.5486	0.0451	*
	私たちは家でけんかをした。	3.596	3.382	2.1476	521.9745	0.0322	*
6.学校での様子	私は親にやりたいことをさせてもらえなかった。	2.884	4.165	14.9697	565.1689	P<0.001	**
	私は友達と一緒に遊んだ。	3.765	3.551	2.1320	520.9128	0.0335	*
	他の友達は私のことを好きだった。	3.940	3.751	2.2243	443.4018	0.0266	*
6.学校での様子	私は私の友達と仲良くしていた。	4.053	4.502	6.7022	525.7464	P<0.001	**
	私は他の子どもたちに比べて変わっているような気がした。	4.018	3.554	4.7945	475.3348	P<0.001	**
	私は学校の勉強は簡単だった。（よくわかった）	3.361	3.716	4.0434	541.2574	P<0.001	**
6.学校での様子	私は学校の授業が楽しかった。	3.551	3.611	0.6440	530.2469	0.5198	
	私はこれからの先のことを心配した。	4.140	3.600	5.9180	454.0654	P<0.001	**
	私は学校のテストで悪い点数をとらないか心配だった。	4.242	3.361	9.0174	448.0491	P<0.001	**

(n=285)

化 I 類を用いてモデル化する。(1) 節で対象となる285 サンプルの、親が認識する子どものQOL得点の平均点と、子ども自身が感じるQOL得点の平均点の差の検定を行っところ、親子の認識の差が生じている18項目が示された。それらを受け、次に各親子間で各項目の得点の差を算出し、それらすべてを説明変数に、親子間での子どものQOL総得点の差を目的変数にして分析を行う。算出の過程は、「(親が認識する子どものQOL得点) - (子ども自身が感じる子どものQOL得点) = (QOL得点の差)」とし、結果を図-5に示す。

レンジに着目すると、「私は私の友達と仲良くしていた。」で最も高い値を示しており、つづいて、「私は疲れてぐったりした。」、「私は頭が痛かった、またはおなかが痛かった」、の項目でのレンジが高い。精度として、重相関係数の2乗は 0.7615であり説明力が高いモデルとなっているが、目的変数のQOL総得点の親子の認識の差は各説明変数によって構成されていることに留意しなければならない。

4. QOL項目と子どもの周辺環境との関連性分析

(1) 友達関係のQOL得点の親子差と周辺環境との関連性分析

前章のQOL総得点に関するモデルで、最もレンジの高かった、「私は私の友達と仲良くしていた」の項目に着目する。1章に記述した通り、親が認識しているQOL得

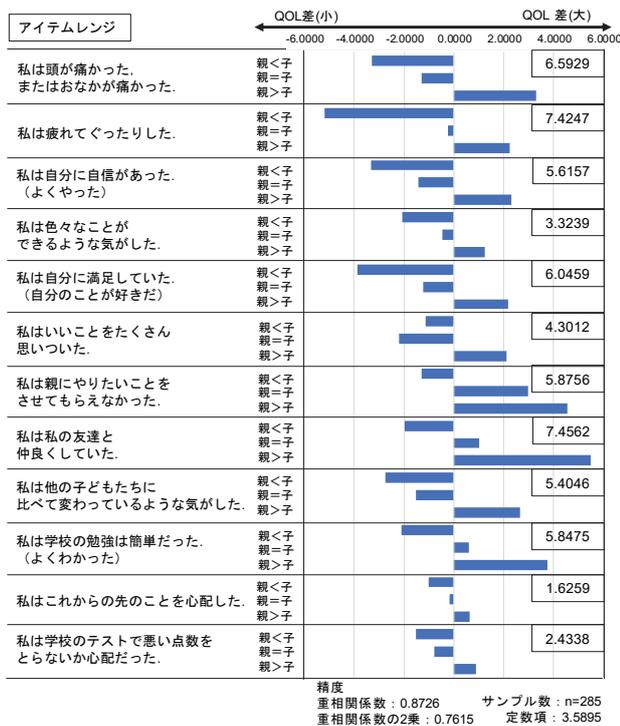


図-5 親子間のQOL総得点の差に関するモデル

点が子ども自身が評価する子どものQOL得点より高い場合、子どもの不具合が把握できていない危険性があり、逆に子ども自身が評価する子どものQOL得点が高いにもかかわらず、親が認識する子どものQOL得点が低い場合、過度な心配や教育につながる危険性も考えらる。つまり、認識の差があるということが子どものQOL向上の障壁に成り得るため、認識の差が生じている親子ペアの子どもを取り巻く環境(遊び・学外活動の状況等)を把握することで、子どものQOLに関する差が生まれやすい状況を明らかにすることが考えた。

そこで、「私は私の友達と仲良くしていた」の項目について、親子の認識の差が生じているペアと認識が一致しているペアの2群に分類し、子どもの周辺環境との関連性をクロス集計(独立性の検定、残差分析)を用いて分析した。「差がある」の基準は親子間でQOL得点に2点以上の差がある場合とし、「一致している」の基準は親子間で同じQOL得点を回答している、もしくは±1点を一致しているとする。

友達関係に関する親子の認識の差と関連のあった項目として、「現在よく遊んでいる遊び時の人数」が挙げられる。これらの関係を、図-6に示す。図より、親子の認識に差がある群では、1人で遊ぶ子ども割合が高く、親子の認識が一致している群では、1人で遊ぶ子どもの割合が低く、5人以上の大人数で遊ぶ子どもの割合が高いことが読み取れる。P値は10%有意水準で統計的に差があることが示された。考察として、1人で遊んでいる場合、友達関係が親から見えにくいことが理由として考えられる。また、本調査では小学1年生時の遊びに関する項目も尋ねており、そちらでも同様の傾向が把握された。

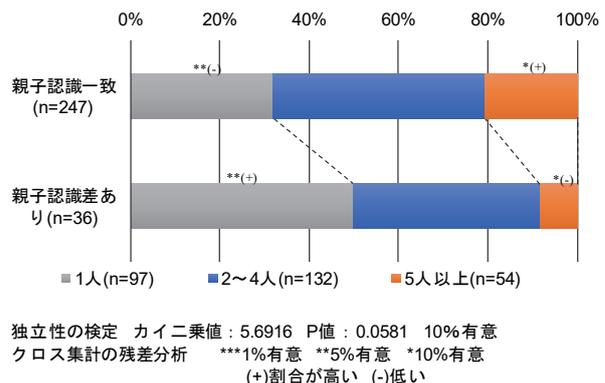


図-6 友達関係に関する親子の認識の差と遊び時の人数の関連

次に関連のあった項目として、「現在よく遊んでいる遊びの内容」が挙げられる。これらの関係を、図-7に示す。図より、親子の認識に差がある群では、ゲーム・マンガを選択する子どもが多く、親子の認識が一致している群では、ボール遊び・遊具でよく遊ぶと回答する子どもが多いことが読み取れる。P値は1%有意水準で統計的に差があることが示された。考察として、先ほどと同様

にゲームやマンガなどの1人でも遊べる遊びをよくする子どもの場合、親が友達関係を把握しにくいのだと考えられる。

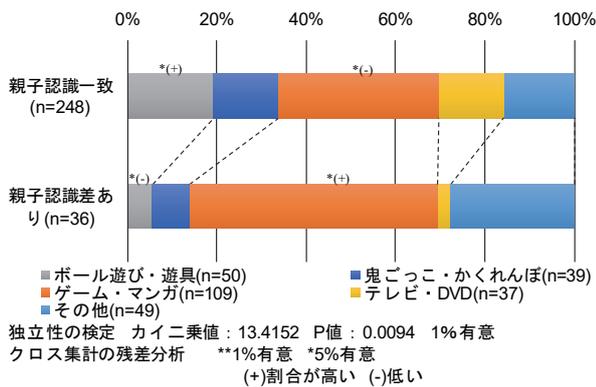


図-7 友達関係に関する親子の認識の差と遊び内容の関連

(2) 身体の不調のQOL得点の親子差と周辺環境との関連性分析

次に、前章のQOL総得点に関するモデルで、レンジの高かった、「私は頭が痛かった、またはおなかが痛かった。」という身体の不調の項目に着目する。身体の不調に関する親子の認識の差と関連のあった項目として、「現在の学外活動の頻度」が挙げられる。これらの関係を、図-8に示す。図より、親子の認識に差がある群では、週に1度も学外活動をしておらず、親子の認識が一致している群では、週2回以上学外活動をしている子どもが多いことが読み取れる。P値は10%有意水準で統計的に差があることが示された。本調査の学外活動は習い事を指しており、習い事の頻度が高い方が体調面の親子の認識が一致していることが示された。また、本調査では小学1年生時の学外活動状況に関する項目も尋ねており、そちらでも同様の傾向が把握された。

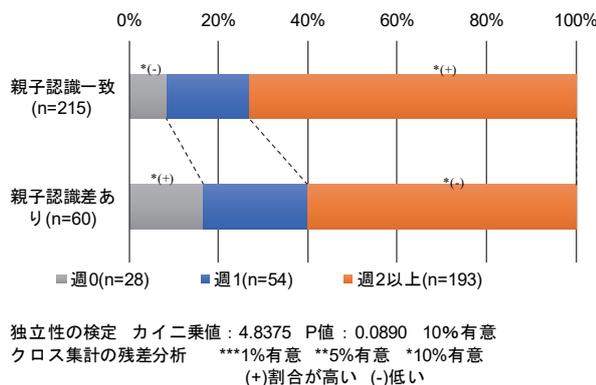


図-8 身体の不調に関する親子の認識の差と学外活動頻度

5. おわりに

本研究では、子どものQOLにおける親子の認識の差に

着目し、認識の差が生まれている項目の把握、また、認識の差がある項目と子どもの学外での行動（遊びや学外活動等）との関連を明らかにした。

結果として、以下の知見が得られた。

- QOL尺度の各質問項目における親子の認識の差を、母平均の差の検定を用いて分析を行ったところ、QOL指標の24項目の内18項目で有意な差が示された。
- 各親子間で各QOL項目の得点の差を算出し、それらすべてを説明変数に、親子間での子どものQOL総得点の差を目的変数にして分析を行ったところ、最もレンジが大きい項目として、友達関係の親子での認識の差が挙げられ、次に身体の不調に関する項目が挙げられた。
- 子どもの友達関係について、親子間で認識の差が生まれている親子ペア群と、認識がほぼ一致している群に分類し、子どもの周辺環境項目との関連性分析を行ったところ、子どもの遊びに関する項目に関連性が見られ、1人で良く遊ぶ、またゲームやマンガを選択する子どもに関して保護者は友人関係を把握しにくいことが示された。
- 子どもの身体の不調についても同様に分析を行ったところ、学外活動（習い事）を1週間の内に一度もしていない子どもに関して、親は身体の不調を把握できていない危険性が示された。

今後の発展可能性として、他のQOL項目と子どもの周辺環境との関連性を分析することを挙げる。

参考文献

- 1) 古荘純一, 柴田玲子, 根本芳子, 松寄くみ子: 子どもの QOL 尺度その理解と活用—心身の健康を評価する日本語版 KINDL^R, 医学書出版診断と治療社, 2014.
- 2) 柴田玲子, 根本芳子, 松寄くみ子, 板橋家頭夫: 小学生版 QOL 尺度による QOL の低い子どもたちの特徴, 小児保健研究, pp. 274-281, 2012.
- 3) 松田智大, 野口真貴子, 梅野裕子, 加藤則子: 小児保健と QOL 研究, 日本公衛誌, 第 53 卷 11 号, pp. 805-817, 2002.
- 4) 高橋俊哉: 子供の健康の現状と課題, 弘前大学教育学部付属教育実践総合センター研究員紀要, 第 10 号 (通号第 20 号), pp. 77-82, 2012.
- 5) 岩坂英巳, 根津智子, 車谷典男, 石塚理香, 牧野裕子, 郷間英世: こどもの QOL と行動特性との関連性について—KIDSCREEN_J52 と SDQ (子どもの強さと困難さアンケート) から—, 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要, 第 23 号抜刷, pp. 97-103, 2014.
- 6) 長尾征洋, 青野隆仁, 戸川卓哉, 加藤博和, 佐野充: QOL 指標と維持費用に基づく撤退・終結市街地の遺伝的アルゴリズムを用いた選定方法, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol.68, No.5, I_339-I_348, 2012.

- 7) 加知博康, 加藤博和, 林良嗣, 森杉雅史: 余命指標を用いた生活環境質 (QOL) 評価と市街地拡大抑制策検討への適用, 土木学会論文集 D, Vol.62, No.4, 558-573, 2006.
- 8) 株式会社価値総合研究所: 欧州における持続可能な地域の評価指標について, 2015.
- 9) 岡山県赤磐市: 赤磐市の人口・世帯数 (平成 31 年 1 月現在), <http://www.city.akaiwa.lg.jp/material/files/group/12/jinkouHPyouH31-1.pdf>
- 10) Ravens-Sieberer, U. and Bullinger, M.: KINDL^R English Questionnaire for Measuring Health-Related Quality of Life in Children and Adolescents Revised Version Manual, 2000.
- 11) 柴田玲子, 根本芳子, 松寄くみ子: 睡眠時間・朝食の摂取状況と中学生版 QOL 尺度得点の関連性, 小児保健研究, Vol. 65, pp. 398-404, 2006.
- 12) 古荘純一, 久場川哲二, 佐藤弘之, 柴田玲子, 根本芳子, 松寄くみ子, 曾根美恵, 渡辺修一郎: 軽度発達障害児における小学生版 quality of life 尺度の検討, 脳と発達, pp. 183-186, 2006.
- 13) 井上敦子, 大下隆司, 小林清香, 岡部祥, 近本裕子, 清水悟, 西村勝治, 服部元史, 石郷岡純: 腎移植を受けた小中学生の抑うつと QOL, 総合病院精神医学, 28 巻, 2 号, pp. 156-166, 2016.

(20???.?? 受付)

A Study on Differences in Parent-Child Perception of Children's QOL

Haruka UNO and Seiji HASHIMOTO

In recent years, in Japan, Quality of Life (QOL), which refers to the quality of each person's life and socially viewed quality of life, is regarded as important, and research on children's QOL is also in progress. In order to further improve the quality of life of children, it is desirable that the parent-child perception of children's quality of life be consistent. In this study, we clarify whether there is a difference between the children's QOL and children's QOL recognized by parents. We also analyze the relationship between items that create a difference in parent-child perception of children's QOL. As a result, 18 items out of 24 items of the QOL scale showed a difference in average scores of parents and children. A detailed analysis of parent-child pairs showed that there was a difference in perceived QOL, especially for parents and children, regarding friendship and physical disorders.